

再発見・牛久第十三話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川(芋銭)家系譜⑥

佐々木・木村・小川

木村長門守重成(常陸介重茲の子)②

—大坂冬の陣・夏の陣—

重成の冬の陣の戦いと

豊臣秀頼正使の大役

大坂城は豊臣秀吉が天下の総力を傾注して築いた古今無双の巨城であつた。

慶長19年(1614年)の8月、東(徳川方)西(豊臣方)が手切れとなると、豊臣方は直ちに軍議を開いて籠城と決定し、城内には新たに墨砦が築かれ、堀も掘削され、有名な真田幸村の出丸・真田丸も築かれた。

冬の陣の緒戦は、11月19日であつた。冬の陣で最も激しい戦いが行われたのは、同月26日の今福・鳴野の合戦であつた。攻め手の徳川軍・佐竹義宣(久保田・秋田藩主)隊は今福に、上杉景勝は鳴野に陣をはり、城方が築いた柵に迫つた。佐竹隊の先陣を切るのは渋谷政光。が佐竹隊は、城中から押し出した木村重成・後藤又兵衛両隊の反撃を受けて敗退、政光も討死した。重成は19歳、この日が初陣であつた。重成は秀頼拝領の金瓢箪

の馬印に中白の旗30本を押し立てて5000人余りを率い、老巧な又兵衛と見事な連携作戦を取り、いずれも、この日の戦いで天下に勇名を馳せた。

重成隊が兵を引いたとき侍大将格の大井何右衛門の姿が見えない。重成は驚いて、ただ一騎で修羅場に引き返し、討死にした死骸の間を大声をあげて捜し回つた。やっと重傷の大井を銃弾が雨あられのごとく飛んできた。大井は、両足を撃ち抜かれて動けない。大井は、重成に、自分を捨てて逃げてくれと懇願したが、重成は、敵が来たからとて、そなたを見捨てて逃げたのでは、はじめから捜さなかつたのと同じではないか、と自ら槍を取つて、味方の加勢が来るまで、その場を動かさなかつたという。

家康は、冬の陣が始まつたばかりの11月20日に和平の工作を開始していた。家康と秀頼が和睦の誓紙を取り交わす12月21日に、重成は秀頼の正使という立場で、二条城へ出向いて家康の誓紙を改めた。

夏の陣(重成が山口重信を討ち、重成は井伊隊の安藤重勝に首を討たれる)

徳川方と豊臣方の和議は成つた。が、家康は、計画的に詐術をめぐら

した。和議の条項にない、大坂城の二の丸の堀の埋め立てに着手し、あれよあれよという間に(一カ月後)、二の丸、さらに三の丸の堀の埋め立てを終了してしまつた。と、同時に家康は、豊臣家討滅のための派兵準備を始めていた。

明けて慶長20年(1615年)。7月13日に元和と改元の2月中旬、再戦近しの声を聞いて大坂城に再び馳せ参じた浪人は、冬の陣にまさるとも劣らず、10万人にも達した。

大坂城は堀が埋め立てられたため、裸城同然となつていた。そこで大坂城内では、秀頼四天王(真田幸村・長宗我部盛親・後藤又兵衛・木村重成)らによつて、再戦となれば、城から討つて出て、大和・和泉方面、片山・道明寺方面、八尾・若江方面などで、敵の主力部隊を邀撃するという作戦を立てていた。

合戦の火ぶたは、4月下旬ごろから切られた。5月6日深夜、重成は4700余の兵を率いて若江(現在は東大阪市若

江南町)に出陣した。若江一帯は、当時、長瀬川と玉串川にはさまれた水田の多い低湿地帯であつた。

若江において徳川軍の井伊直孝隊と重成隊とが激突した。井伊隊の山口重政(初代牛久藩主)の息子重信は、重成の槍に掛つて馬上よりつき落とされて落命した。重政に息子重信討死の知らせが届くと、痛憤して猛撃に出て、重成隊の内藤長秋等、主だった士を討つた。味方の不利をさつた重成は、配下の将士の止めるのも聞かず、突撃を開始し、庵原朝昌と槍を合わせ、傷ついて倒れたところを、安藤長三郎重勝に首を討たれ、壮烈な最期を遂げた。

家康が重成の首実検しているとき、髪にたきこんだ香の匂いがただよつてきた。家康は「いま皐月(5月)の初めだというのに、いささかも首に臭気もない。これこそ勇士のたしなみというものだ。皆の者ここに来て首を嗅いでみよ」と死にのぞむ武士たる重成の嗜みを褒めたたえたという。



山口重信の墓
【所在地】東大阪市若江東6丁目「若江南墓地内」
正保4年(1647年)重信の33回忌に、弟で牛久藩第2代藩主山口弘隆によって建てられた。



木村重成の墓
【所在地】大阪府八尾市幸町「木村公園内」
当地にある墓は、明和2年(1765年)重成150回忌に当たって、重成を討ち取った彦根藩士安藤長三郎重勝の子孫安藤次輝が建立した。